

発表 4. 概要

発表者	佐々木 聡 (第 4 分科会 主査)
タイトル	「国際的通用性と日本の技術者の育成」 ー 『コンピテンシー』 一緒に考え 表現しようー

皆様方の多くは、昔の技術士試験には「技術的体験論文」があったことをご存知と思います。2000 年の技術士法の改正は、海外の Professional Engineer (PE) との同等性を目指したのですが、それは業績重視の資格から、海外の制度と同様に、将来責任ある立場に就くための資質を確認する資格への方針転換を目指すものでもありました。

その後、業績を前提とした「技術的体験論文」が、合格者の平均年齢を引き上げる一助と考えられ、2013 年に廃止されました。そして 2014 年、国際エンジニアリング連合 (IEA) の「専門職として身に付けるべき知識・能力」(PC) を踏まえた「技術士に求められる資質能力(コンピテンシー)」が定められ、2019 年試験に取り入れられました。

突如現れた「コンピテンシー」に戸惑いつつも、中身は当たり前の社会人としての能力です。これが何故、技術士制度改革か？何故、海外制度に盲目的に従うのか？そう思われた方もいるでしょう。実際、海外の制度を調べると、コンピテンシーの獲得を「技術的体験」を元に実証している国もあるのです。古今東西、技術者の能力の本質が変わるわけではないのです。

ただし、社会の急速な変化と共に変わるものもあります。最近のビジネスの話題も新しい教育の話題もキーワードは課題発見・解決能力です。アクティブラーニングの受講世代も 30 代に達します。では、コンピテンシーとは何か？技術士として意識的に使いこなす表現するにはどうしたら良いか？このための情報を皆様方と共有したい。これが私どもの目的です。

2021 年全国大会の第 4 分科会では、最初の基調講演で、以下の 3 つの話題を提供します。

- 技術士制度改革を、世界標準的な人材育成の考え方から捉え直す
- 国際的通用性導入の経緯と、従来型企業も含めて導入が進まない原因を分析する
- 教育現場や IT 人材の育成等、導入が進む分野の事例を確認する

さらに、続くパネルディスカッションでは、一人ひとりがコンピテンシーの広告塔となることを目指し、「技術士として、コンピテンシーをどのように示せばよいのか?」、「人材育成の中間目標として、技術士制度が利用できることを社会に理解してもらうためにはどうしたらよいのか?」を一緒に考えたいと思います。皆様方のご参加をお待ちしています。